

## 第二章 戦時の体験に学ぶ

### 第一章 平和国家が揺らいでいる

#### 1 軽々しく扱われた人間の命

- 1 カントは『永遠平和のために』を著した  
柄谷行人 カントの永遠平和論を必要とする時代になつた  
加藤典洋 カントを援用して「國土防衛隊」を提唱する  
梅原猛 憲法にはカントの理想が語られている  
水島朝穂 なぜ著書の序文にカントの言葉を入れたか

- 2 戦争に向かう國家体制を危惧する  
池内了 宇宙開発を歪める軍事利用 040  
伊藤和子 戦争による人権侵害の加害者になるな 044  
奥平康弘 市民社会に国家が介入し始めた 048  
瀬戸内寂聴 戦時色の強まる空気がある 052  
森村誠一 戦争のための三點セットが用意された 056

- 3 政治家の資質を問う  
阿刀田高 政治家の言葉が貧しくなつた 062  
色川大吉 無能な戦前の政府に重なる現政権 066  
加賀乙彦 日本の政治家には平和国家を築き上げる胆力がない 070  
高村薫 首相は憲法を個人のオモチャにしている 074  
鶴見俊輔 政治家は戦争の歴史から学べ 078

### 第一章 平和国家が揺らいでいる

- 1 カントは『永遠平和のために』を著した  
柄谷行人

- カントの永遠平和論を必要とする時代になつた  
加藤典洋  
梅原猛  
水島朝穂

- 憲法にはカントの理想が語られている  
なぜ著書の序文にカントの言葉を入れたか

- 2 戦争に向かう國家体制を危惧する  
池内了  
伊藤和子  
奥平康弘  
瀬戸内寂聴  
森村誠一
- 3 政治家の資質を問う  
阿刀田高  
色川大吉  
加賀乙彦  
高村薫  
鶴見俊輔

#### 1 軽々しく扱われた人間の命

- 金子兜太 爆死と餓死の島で「蹴戦」を誓った  
水木しげる 熱病で苦しみ爆撃で片腕を失つた  
新藤兼人 クジで決まつた戦死と生き残り  
森光子 慰問の前線で特攻兵士を見送つた  
ちばてつや 凍りついた遺体はカラカラと音をたてた  
海老名香葉子 家族六人を奪われた東京大空襲  
高木敏子 母と二人の妹の遺体は見つからなかつた  
松谷みよ子 空襲のたびに防空壕に潜り込んだ  
益川敏英 名古屋空襲で火の海を見た

- 林京子 こんな死に方は絶対に認めない  
早坂暁 原爆は未来を殺す絶滅爆弾  
松島トモ子 瞳の父はシベリアで抑留死  
D・キーン 日本軍の暴虐が自決を招いた

- 2 戦争の準備は市民社会の統制から始まる  
堀文子 決起した兵士に銃口を向けられた  
野見山暁治 私服の特高警察に詰問された  
森南海子 千人針は女の悲しい針目  
司修 国は戦争画によつて国民を騙した  
大田堯 権力は教育を使って国民を同化させる  
高橋哲哉 教育現場への管理強化は戦争への道  
山中恒 国家は新聞社に「輿論指導」を通達した

### 第一章 平和国家が揺らいでいる

- 1 カントは『永遠平和のために』を著した  
柄谷行人

- カントの永遠平和論を必要とする時代になつた  
加藤典洋  
梅原猛  
水島朝穂

- 憲法にはカントの理想が語られている  
なぜ著書の序文にカントの言葉を入れたか

- 2 戦争に向かう國家体制を危惧する  
池内了  
伊藤和子  
奥平康弘  
瀬戸内寂聴  
森村誠一
- 3 政治家の資質を問う  
阿刀田高  
色川大吉  
加賀乙彦  
高村薫  
鶴見俊輔

#### 1 軽々しく扱われた人間の命

- 金子兜太 爆死と餓死の島で「蹴戦」を誓った  
水木しげる 熱病で苦しみ爆撃で片腕を失つた  
新藤兼人 クジで決まつた戦死と生き残り  
森光子 慰問の前線で特攻兵士を見送つた  
ちばてつや 凍りついた遺体はカラカラと音をたてた  
海老名香葉子 家族六人を奪われた東京大空襲  
高木敏子 母と二人の妹の遺体は見つからなかつた  
松谷みよ子 空襲のたびに防空壕に潜り込んだ  
益川敏英 名古屋空襲で火の海を見た

- 林京子 こんな死に方は絶対に認めない  
早坂暁 原爆は未来を殺す絶滅爆弾  
松島トモ子 瞳の父はシベリアで抑留死  
D・キーン 日本軍の暴虐が自決を招いた

- 2 戦争の準備は市民社会の統制から始まる  
堀文子 決起した兵士に銃口を向けられた  
野見山暁治 私服の特高警察に詰問された  
森南海子 千人針は女の悲しい針目  
司修 国は戦争画によつて国民を騙した  
大田堯 権力は教育を使って国民を同化させる  
高橋哲哉 教育現場への管理強化は戦争への道  
山中恒 国家は新聞社に「輿論指導」を通達した

